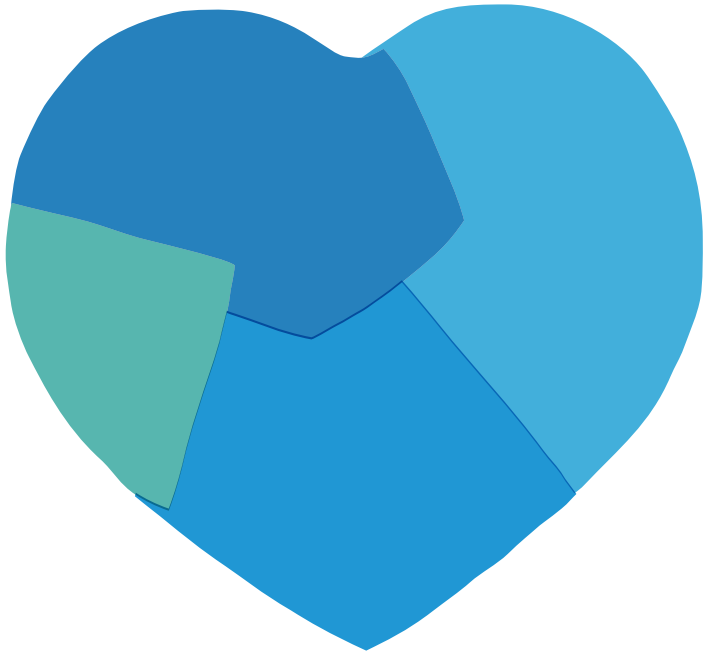
財団法人 大阪府人権協会



鉄道自殺の波紋

STOP RAILROAD SUICIDE

もくじ

1 冊子「波紋」を制作することについて

2 人身事故のアナウンスが流れるたび
単なる"障害物"ではない
父の「すばらしい人生」を思う

6 クリスマスイブのホームで思いつめた
引き戻してくれたのは息子の信頼だった

10 毎朝仏壇を開けて、起こしてあげて、旅行も一緒に
主人は今も家族の一員として「生きて」います

14 初めての挫折に打ちのめされた18歳
あの苦しさが今の自分をつくっている

冊子「波紋」を作成することについて

財団法人大阪府人権協会では自死・自殺の問題は大切な人権課題ととらえ、自殺防止の事業を行っています。

今回は大阪府自殺防止対策緊急強化事業の補助金を受けて鉄道自殺調査事業を行いました。その一環としてこの冊子「波紋」を作成させていただきました。

今回の冊子を作成するにあたり、お話いただいた4名の方をはじめ多くの方にご協力していただき、支えていただきました。ありがとうございました。

この冊子を自殺防止や自死遺族支援にお役に立ていただければ幸いです。

2012年 3月
財団法人 大阪府人権協会

人身事故のアナウンスが流れるたび、
単なる〝障害物〟ではない、
父の「すばらしい人生」を思う。

24歳で初めて事実を知る

私が1歳の時、父は駅のホームに入ってきた電車に飛び込んで亡くなりました。
私に対しては病気で亡くなったとごく簡単に説明されただけで、くわしく聞ける空気ではなく、私は「何か隠されている」という感覚をもちながら育ちました。

本当のことを知りたいと思いながら、なかなか言い出すきっかけがありませんでした。ようやく話を切り出す決意が固まったのは24歳の時です。まず「殺されたの？」と訊くと首を横に振りました。次に「自殺したの？」と訊くと、うなづいてワーッと泣き崩れて。記憶があまり定かではないんですけど、責めるような口調だったかもしれません。「首つりやったん？」「飛び降りたん？」と訊いていって、何回目かに「電車に飛び込んだん？」と訊いたら、母が泣きながら「うん」と。

遺書もありました。父にとってまったく納得できない異動を命じられたのが、自殺の大きな原因だったようです。遺書には「どこにも居場所がない」という旨のことも書かれていました。

父が生きていたという証を求めて

事実を聞いて、しばらくの間は「私は鉄道自殺した父親の子どもなんだ」という声が頭のなかで繰り返し響いていました。それでも、聞けてよかったと思います。
「もしかして捨て子なのか」とまで思っていた大きな疑問が解けましたから。

26歳の時、父の実家である島根の祖父母に「父について本当のことを知りたい」と長い長い手紙を書きました。祖父母とは母と一緒に毎年帰省するほど良好な関係でしたが、やっぱり父の話題はタブーという空気がありました。けれど祖父母はすぐに了解してくれました。

島根の家には私が存在すら知らなかった、「開かずの間」がありました。
父が学生の頃に使っていた部屋です。祖母が母に気を遣い、私に見せないようにしていたようです。祖母はその部屋に案内してくれ、「お父さんが生きてたという証拠が欲しいんやね」と言ってくれたんです。まさに私の気持ちをぴったりと言い当てた言葉でした。

「自殺」の暗いイメージが覆された

「開かずの間」には、たくさんのものがありました。父が好きだった登山やスキーの帽子。けっこう筆まめだったみたいで、日記や友人からの手紙。父が着ていたTシャツやセーターも残されていました。Tシャツを抱きしめたとき、「ああ、ほんまに生きてたんやなあ」と初めて父を感じました。このTシャツに手を通した人が確かにいたんだと。ひょうきんなことが書いてある手紙や日記からはおぼろげに人となりが伝わってきました。アルバムには楽しそうな父の写真がたくさんあって、「私より人生を謳歌してるやん」と。手帳には引っ越しの準備や出発のスケジュールがびっしりと書いてあって、不本意ながらもきちんと準備を進めていたことがわかりました。

自殺ってすごい暗いイメージがありますよね。「几帳面で真面目な人が思いつめて」みたいな偏った見方がありますが、それが覆されました。島根から帰る前日、一人で父のお墓に行ったんです。その時、父に対して初めて「しんどかったね。もういいよ、ゆっくり休んで」という気持ちになりました。

謝罪のアナウンスに、責められる思い

電車に乗っていると、「人身事故で電車が遅れております。ご迷惑をおかけして申し訳ありません」というアナウンスが流れることがあります。その時、自分が圧倒的少数の立場なんだと思い知らされますね。そのアナウンスを聞くつらさは、たくさんの人のなかで自分だけ。「わかってくれてへんなあ」という気持ちと同時に、責められているような気持ち。「電車が遅れて申し訳ありません」と謝るということは、鉄道自殺をした人が「悪い人」ということでしょう。「ああ、やっぱり自殺する人は迷惑かける人という見方があるんやなあ。」と思ってしまうんです。

確かに迷惑かけてるんやけど、たとえば電車が10分20分遅れて困るレベルよりももっと深刻なレベルで悩んで死んだ人の人生があること、そして私の父のようにすばらしい人生があったということはわかってもらえてない。電車の通行を妨げる障害物でしかなくて、「遅れて申し訳ございません」と言われてしまう。歪んでるかもしれないけど、そう受け止めてしまうんです 。少し前まではこんな気持ちすら「言っていい」とは思えませんでした。私たちみたいな立場の人間は黙っているしかないというか。

今も、母と電車に乗っている時にあのアナウンスが流れたら、すごく気まずいと思います。もし友だちと一緒だったら、自分の気持ちに蓋をして当事者でない自分を演じて「遅れるやんか」と一緒に文句を言うような気がします。

父の鉄道自殺から生きる目的を得て

自殺防止の取り組みがいろいろされていますが、少し前の私はそれを目にするのもイヤでした。でもここ1、2年は、当事者の話をしっかり聞いて、寄り添いながら活動している人たちがいるのを知り、安心感をもてるようになりました。ホームに防護柵のある駅が増えてきたのはうれしいですね。父のことが生かされているんだと感じます。

父が鉄道自殺をしたことは、私が生きていくうえでの前提になっています。自殺は個人の問題ではなく、世の中に不十分な部分があってその穴にはまったということ。それを伝えていくのが生きる目的のひとつになりました。だから今は、父の鉄道自殺をマイナスなだけの経験とは受け止めていません。

クリスマスイブのホームで思いつめた
引き戻してくれたのは息子の信頼だった

人目を気にしながら

もう10年以上前のクリスマスイブのことです。お昼過ぎた頃、私は二男を連れて駅に向かいました。

当時、前夫の事業がうまくいかなくなり、多重債務に陥って身動きがとれない状況でした。数日ごとに支払日がきて、頭のなかは常にお金のことでいっぱい。そんな生活を終わらせたいと調停を申し立てたら、業者から「今から家に行ったるからな！」とすごまれました。

家には帰れない、実家も頼れない。追いつめられた私は、「もう死ぬしかない」と考えたんです。おかしなもので、そんな時でも人目が気になるんですね。じっとしていたら怪しまれると思い、短い路線を一駅ごとに降りたり乗ったりしてはホームのベンチでしばらく過ごすということを繰り返していました。

「次の電車がきたら」と思いながら、「この子の目の前で飛び込んだら、大きな心の傷を負わせてしまう」「でもこの子と２人で飛び込んだら上の子は傷つくだろう」「それに夢をもってがんばっているこの子の将来を奪うわけにはいけない」と堂々巡りで、なかなか決心がつきませんでした。

息子の信頼を感じて踏みとどまる

息子は何も訊かず、「寒いね」などと他愛のないことを話しかけてきました。時々温かい飲み物を買い、両手と体を温めました。息子が自動販売機で買ってきてくれるんですが、ずっと私から目を離さず、「お母さん、どれがいい？これ？」と話しかけてくるんです。いつもは適当に買ってくるのに。

やがて日が暮れました。会社帰りのサラリーマンの手にはクリスマスケーキの箱がありました。そこに幸せが詰まっているような気がして、「私はもうあの箱を持つこともできないんや」と一層みじめな気持ちになりました。

そんな時、息子が「お母さん、帰ってケーキ作らなあかんやん」と言ったんです。その言葉に私に対する信頼を感じて、「そうやなあ」と答えていました。もし「もうこんなところにいるのはイヤや」とか「先に帰ってるわ」と言われていたら、私はきっと飛び込んでいたと思います。

寄り添ってくれる人たちに支えられ

その後も離婚、母の自殺とさまざまな試練がありました。リストカットを繰り返していた時期もありますが、子どもたちや相談機関の人に支えてもらいながら乗り越えてきました。

救われたのは、子どもたちや支援してくれた人たちが決して私を責めたり説教したりしなかったことです。むしろ「よくがんばってるね」とこまめに褒めてくれ、私はその言葉に励まされてきました。今は私自身が多重債務に悩んでいる方の相談にのっていますが、かつての私がしてもらったように「寄り添う」ことを一番大事にしています。

あのクリスマスイブから2年ほど後、2人の息子と駅で電車を待っている時、目の前で人が電車に飛び込みました。上の息子は驚く程度でしたが、下の息子は大きな体でしがみついてきました。その後もしばらく黙り込んでしまい、やはりあの日のことがトラウマになっているのではと心が痛みました。
でも息子は逆に「お母さん、あの頃はほんまにしんどかったんやね」といたわってくれます。

今でも、寒い時期にあの駅に降り立って、お母さんと子どもがベンチに座っている姿を見たら「あっ」と思いますよね。それと同時に息子に心の中で手を合わします。ちゃんと育ってくれて、自分の夢をかなえてくれて、ありがとうと。

毎朝仏壇を開けて、起こしてあげて、旅行も一緒に
主人は今も家族の一員として「生きて」います

いつもと同じ日曜日に

6月の日曜日。主人は突然、一人で逝ってしまいました。

直前まで、いつもと変わらない日常でした。その年の3月からうつ状態で休職中だった主人は、よく家事をしてくれていました。その日もいつもの週末のように私と一緒にスーパーを回り、いったん帰宅した後、友だちとの約束があった私は一人で出かけました。洗濯物をたたんでいる主人に「行ってくるね」と声をかけると、私の顔を見て「いってらっしゃい」と言ってくれました。それが主人と交わした最後の言葉でした。

中学3年だった娘が塾へ出かけた後、高校2年だった息子と主人は一緒にお好み焼きなどを買いに出かけ、昼食として食べたそうです。主人が息子に、娘のぶんも残しておいてやりなさいと声をかけたことを、後で息子から聞きました。いくら考えても、主人にとっていつもと同じ日曜日だったとしか考えられません。

ご近所さんの温かい言葉に救われて

夕方、主人は息子が自分の部屋でうたた寝をしている間に外へ出たようです。歩いているところをご近所さんにお会いして、自分からあいさつをし、その2、3分後に事故が起きました。

ご近所さんと会った場所から50メートルほど先に踏切があります。そこまで歩き、下りていた遮断機の前で立ち止まった主人は、電車がさしかかった瞬間、吸い込まれるように入っていったそうです。警察の人が目撃証言の書かれた調書を見ながら教えてくれました。

その踏切は駅に向かう道の途中にあって、私たち家族もご近所さんも毎日通ります。だから近所の人たちに申し訳なく、「ごめんね」「イヤな思いさせるね」と会う人ごとに謝っていました。するとある人が「そんなことないよ、あなたのご主人があそこで守り神として見てくれてると私は思ってるから」と言ってくれたんです。

実はその踏切のそばにいるのがとてもつらくて、引っ越しも考えていました。その気持ちを察してか、お向かいの方が「引っ越しなんて考えたらあかんよ。うちの向かいはお宅じゃないとイヤよ」と声をかけてくださったんですね。今、私たち親子3人がこうしてやってこられたのも、ご近所の方の温かい言葉があったからです。

子どもを捨てて死ぬような人じゃない

遺書はなかったので、主人の本当の気持ちはわかりません。ただ、うつになる前は残業が続き、過労で疲れ切っていました。子どもたちが大好きだった主人は、子どもを捨てて死ぬような人ではありません。子どもたちにも「お父さんに捨てられた」とは思ってほしくない。

そう考えて、労災申請をすることにしました。3ヶ月半で労災が認められたのは奇跡のようなものでした。そして主人が亡くなって1年後、会社に対して民事裁判を起こしました。主人のことを忘れてほしくない、そしてもう二度と過労自殺を起こしてほしくないという思いからです。労災申請の時に協力してくれた組合の人からは「恩知らず」と言われました。

一番つらい苦しい2年間でしたが、会社に見舞金補償制度をつくってもらうということで和解しました。過労死が起きた時には遺族に対して見舞金が支払われるというものです。子どもたちは「お母さんががんばった甲斐があったね」と言ってくれました。

毎日、踏切で声をかける

先日、娘と一緒に乗っていた電車で人身事故に遭遇しました。急ブレーキに驚いたら人身事故だとアナウンスが流れ、1時間半、車内に缶詰となりました。いつかこういうことが起きたら自分は絶対にパニックを起こすだろうと思っていましたが、娘が気付いてずっと話しかけてくれたのでなんとか冷静でいられました。

みんな、慣れっこなんでしょうか。車内は静かで、黙って電車が動くのを待っていました。私たちの前に座っていた2人連れの男性だけが手を合わせていました。私と娘も物陰でそっと手を合わせました。ひとくくりで「人身事故」と言われていますが、その人その人の事情や背景、思いがあると思うんですね。

私は今も毎日、主人が亡くなった踏切を通って通勤しています。通る時、倒れた主人にシートがかぶせられていたあたりを見て、「いってきます」「ただいま」と心のなかで声をかけるんです。踏切が閉まる時は必ず2、30メートル手前で止まります。直前まで行くと、私もフッと引き寄せられるような気がして怖いんです。

毎朝、仏壇を開けるのは私ですが、うっかりしていると娘が「お父さん起こしてあげてよ」と言って開け、お水を換えたりしてくれます。旅行に行く時は写真を持っていき、「ベッドメイクの人、びっくりしはるね」と言いながら部屋に置くんです。主人は今も家族の一員でいつもいっしょです。

悔しい気持ちを抱えながら、前を向いて

労災の認定が下りて、娘の高校受験が終わった頃、ホッとしたのかドーンと落ち込みました。仕事はミス続出で、泣けてきて。このままでは主人と同じようになってしまうと、カウンセリングの勉強を始めました。勉強を通じて自分を客観的に見られるようになって、つらい気持ちを仲間に吐き出せて、少し楽になりました。

今も主人を救えなかったことは悔しくてたまりません。この思いは一生抱えていくんだと思います。でも、主人が見てくれているのを感じるんです。そして私たち家族が笑っていたら、「うんうん」と主人も笑ってくれるんですよ。

逆に悲しい顔をしていると、「ごめんね、僕のせいでごめんね」って謝ってきて心配する気配を感じます。主人を心配させたくないから謝らせたくないから前を向いて、私らしく生きていこうと思っています。

初めての挫折に打ちのめされた18歳
あの苦しさが今の自分をつくっている

生きる意味を見失い、駅のホームに

大学受験を控えた18歳の冬、電車に飛び込もうとしたことがあります。僕、まあまあ成績優秀だったんですよ。でも高3の夏頃から友だちとの関係に悩むようになって、勉強が手につかなくなってしまいました。センター試験の頃には志望校に届く学力ではありませんでした。

当時の僕にはこれといった特技もなく、成績だけがよりどころだったんです。周りからも「勉強のできるヤツ」と見られていました。勉強ができなくなった自分はもはや存在価値がないとまで思いつめました。でも同時に「オレはこんなもんじゃない」という強烈な自負もあって、すごくしんどかった。

不思議なんですけど、その頃はすごく人の視線に敏感でした。すれ違う人すべてが僕を見て気持ち悪いと思っているように感じたりしましたね。おかしなことに、飛び込むつもりでホームにいる時も人の目が気になるんですよ。

通過する特急が近づくたびに「よし」と思うんだけど、いざとなるとやっぱり怖くて足がすくむ。そのうち人の目が気になってきて。同時に両親や兄のことを考えました。ホームにいたのは2、30分だったと思います。

飛び込むのはあきらめたけど、死にたくなくなったわけじゃありません。
「ここで1回死んだものと考えよう。残りの人生はおまけなんだから好きなことをしよう」と自分に言い聞かせたんです。すごく寒い日だったのを覚えてます。

父が連れ出してくれた夜のサイクリング

予想通り志望校は不合格で、滑り止めの大学になんとか合格という結果でした。
入学式までの間、僕はほとんど家にひきこもっていました。そんな僕を父親が夜のサイクリングに誘ってくれました。サイクリングといっても、ただ夜の町を自転車で走るだけです。

その年頃の男の子って、あんまり父親と話さないし、親と行動するのってイヤじゃないですか。僕もそうで、「こんなところを友だちに見られたら」とか考えてました。でも、それがよかったんです。外の空気にあたって体を動かしている時だけは鬱屈した気持ちを忘れられました。夜だからあまり人に会わないのもよかったです。ほとんど会話はなく、ただ黙って2人で自転車を走らせていました。

父は僕が悩んでいることはわかっていたと思います。でも何も言わず、一緒に体を動かしてくれた。今思えばありがたいですね。

あの頃の自分を忘れたくない

その後、僕は映像という「やりたいこと」を見つけました。大学を中退してバイトでお金を貯め、親にも援助してもらいながら専門学校に入り直して映像を学びました。バイトはかけもちで、1日12時間働きました。

全面的に親に頼ることもできたけど、自分の決意を示したかったんです。
がむしゃらに働くうちに、「死にたい」という気持ちも、「おまけの人生」という考えも消えていました。

今は映像の仕事で食べています。やりがいも夢もあります。あの時、電車に飛び込まなくてよかった。でもあの頃の自分を忘れたくないという気持ちもあります。

特急であのホームを通ると思い出しますよ。生きることについて真剣に苦しんだことが、今の仕事にもつながっている気がします。

発　行｜2012年 3月
発行元｜財団法人 大阪府人権協会
大阪府大阪市港区波除4-1-37 HRCビル8階（AIAIおおさか）〒552-0001
電話：06-6581-8613　FAX：06-6581-8614　URL：www.jinken-osaka.jp